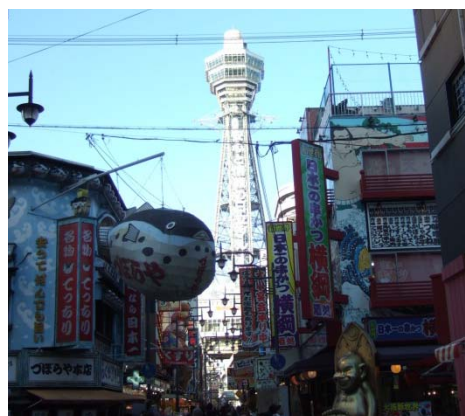


## 大学院時代の思い出(2)

大学院入試は学部時代には受けていない(時遅く入試が終わってから、進学を志した)ので、初めての経験である。ドイツ語には自信があったが、学部時代の不勉強により、専門論文試験の出来が良くなかったようだ。残念ながら4番目であり、3人の「合格枠」に数点差で届かなかった。現在とは違い、当時の大学院の多くは「研究者養成」ということで、かなり狭き門であった。

宮本先生から下宿に電話があり、「不合格」の知らせに涙するばかりであった。下宿のおばちゃんも一緒に涙してくれた。泣いていても、結果はどうにもならない。数点差なら、「あと1年頑張れば、なんとかなる」と腹をくくって、再度のチャレンジとなった。こう書くと格好よくみえるが、実際は落ち込んだ毎日が続いた。

「苦難の浪人時代」のささやかな楽しみは、大阪のまち歩きであった。道頓堀あたりの古本屋めぐりも、好きなコースだが、なんとといっても天王寺・あべの界限、なかでも通天閣周辺がいちばんのコースであった。写真は最近の通天閣界限であり、若者や内外の観光客で賑わう「観光スポット」である。当時は一見物騒な感じがする「おっちゃんの町」であった。おっちゃんと同様に、「めっちゃ安のお酒」を飲むのが数少ない楽しみであった。写真の近くに「ジャンジャン横丁」があり、その串かつ屋で飲むことが多かった。このレポート集にも「ジャンジャン横丁」のことなどが2004年2月15日、2007年2月23日に書いたものを掲載してある。今でも大阪に行くときは、しばしば訪ねる。



話は変わるが、次の写真は今年1月に撮った大阪市大・学術情報総合センター(通称学情センター)である。ネットによると、1996年10月に図書館機能と高度情報処理ネットワーク機能を兼ね備えた「知識の館」として開設されたとある。なぜ学情センターかという、「浪人時代」と大学院時代に当時の図書館をよく利用したからである。法学部棟の横にある古い建物であったが、「浪人時代」などは冷房のきいた部屋で丸一日を過ごした。大学院時代には書庫のなかで本を探し回り、貴重なアメリカの公共事業の文献を見つけたことなどを覚えている。

退職後に名大の中央図書館をよく利用させてもらっており、つい昔の図書館通いのことが思い出された。なんだか最近「浪人時代」と大学院時代の気分を味わっている感じだ。

(2014年8月23日)